

雪線の岸辺—若き思い出のために

「とっておきメモ帳 7」で、戦後復興期の本学の様子を紹介した。この記事が、当時学生だった方々の目にとまり、貴重な資料を寄贈いただいたり、お話を伺ったりする機会が増えた。そんな中に、1949 年（昭和 24）7 月に行われた山岳部の夏山合宿の様子を記録した手書き原稿がある。書いたのは羽賀舜布さん（1952 応化，旧制，ダイセル）で、「重い荷物を背負っての登山だけでも死ぬかと思うほど苦しかったのに、よくこれだけの記録を書き残したものだ」と仲間からも感心されている。その手書き原稿（一部を最終頁に掲載）を、読み易いようにと、山岳部の同僚だった須山英三さん（1953 化工，新制第 1 期生，東京放送）と山岳部の後輩である小野恒司さん（1960 金属，UCLA）がワープロ及び画像ソフトを使ってきれいに仕上げてくださった。判読できないところは、著者の羽賀さんに確認しながらの作業で、2 週間がかりの大仕事だったようだ。かなりの年配にもかかわらず PC と最新ソフトを使いこなしておられるのは山岳部で培われた冒険心と大岡山で鍛えられたチャレンジ精神のなせる業だろうか。

1949 年といえば新制の第 1 期生が入学した年だが、新旧が混在したために大学側の準備が追いつかず、6 月 21 日の入学以降、9 月 1 日まで新制組は授業がなく自宅待機となっていたので、まだ入部の機会はなく夏山合宿にも参加できなかったようだ。同じ 1949 年入学でも、旧制は 3 年間ゆえ 1952 年 3 月の卒業、新制は入学から 4 年後の 1953 年 3 月の卒業となった。余談だが、旧大岡山駅は切符売り場と改札口が地下にあった。新制第 1 期生の授業がいよいよ始まるという 1949 年 9 月 1 日、関東地方は、運悪く、前夜から豪雨を伴う台風（キティ台風）に襲われ、この地下が水浸しとなった。初日に駅が一時閉鎖されるという困った出来事があったが、9 月から 3 月までの 7 ヶ月間にしっかりと

1 年分の勉強はこなしたそう。そうはいってもスピードについていけない学生も多かったようで、新制の入学定員 300 名のうち 4 年間で卒業できたのは 248 名だった。大雑把に 5 人に 1 人が留年というから、教授陣は妥協しなかったようだ。

本年（2015）の 3 月 14 日に北陸新幹線が開業し、「黒部宇奈月温泉駅」という日本一長い駅名が誕生した。ここで紹介する手記の登攀（とうはん）ルートはこの宇奈月から始まる。南には剣，立山連峰，北西には黒部扇状地が広がり，そこには日本一うまい水が自慢の湧水の里もある。65 年前の夏に、本学の山岳部が富山県側（宇奈月）から長野県側（大町）へと北アルプス越えをした。そのときのルートと様子を当時の新入部員の登攀記録をもとに辿ってみよう。



12 名の登攀メンバー（1949 年 7 月 16 日、池の平小屋の前にて）

後列左から、数字は学年：阪東憲一郎 3，羽賀舜布 1，森田豊リーダー 3，森田稔 2，石川伝七 3，上島繁美 3，川崎礼三 2，蔦川（吉田）真 2；前列左から：原田保男 3，劉燈宝（留学生）3，谷岡哲雄 1，滝川和男 2。石川さんも手記を残していたことが分かった。この写真を撮った頃、石川さんの実家では大変なことが起きており、帰京すると電報が届いていた：「〇〇〇〇 カエレ チチ」。一体何事が（→17 頁以降参照）。



夏山合宿

14～26, July 1949

雪線の岸边に咲く

エーデルワイスの花を尋ねて

私達山に登るものは、何故にこの様にまで山々を愛するのであろうか。それは山々のその形態の美しさにあるのだろうか。或は時には危険を伴うその登攀の困苦の闘いに依って得る純な肉体的な歓喜に因づくのであろうか。或は又それはこの山々の至高の王国への関門を護る氷と岩との^{しょうへき}牆壁（障壁）を打越えて、そこに安全な途を見出すために、我等の機智を置かしめるその精神的な歓喜に因るのであろうか。

またそれは黎明のその神秘的な指先に依ってなされる、雪、岩、空のその色彩と調子との壮麗な交響樂が、我等に訴える、その視覚の特異な快感に因るのであろうか。

それとも又、それは^{ぐんらん}群巒（群峰）を^{そび}壓して聳える、高峰の頂きに立って、私達の周囲に新しく広がった、広い地平線の觀想の不思議な、刺激的な、精神の上に依るのであろうか。或は又、それは同じ一條のザイルに相互を長い間、結ぶその友達たることに依って、私と友との間を固く結ぶ、同情と信頼と友情との、人と人とのひとつの連鎖にあるのだろうか。

すべてこれ等の、尚他にまだ数多くあるいろいろな理由に対して、山は単なる言葉に依って言い表されるには、あまりに微妙に登山者の心にまで親しいものである。

Harold Raeburn

（スコットランド生まれ；訳者不明）

若き思い出のために

27年卒 羽賀舜布

これは未だ本隊と合するまでの汽車道中のことであるが、少々特筆すべきことと思うから、この事も序いでに書き添えよう。

蔦川氏と俺は或る特別の任務（たいしたことはない、馬鈴薯と米少々と味噌とを買って持って行くこと）を負って14日朝4時に浦佐を出発した。

13日の夕方蔦川氏が俺の家に来てからようやく山行きの支度をする始末、大体が縫い物で、二人で夜半過ぎまでやった。蔦川氏には大変迷惑をかけてしまった。本当を云えば、こう云う準備の悪いのはいけないのだが。

3時間の少ない睡眠をとって浦佐を出発、発車時刻カツカツに行って、切符を買えず、何とか云う証明書をもらって乗車。長岡5時着、50分待たされて、柏崎で直江津行きを待つ？ どうした間違いか直江津行きは連絡がない。

貨物と連結で柿崎までしかいかないとのこと。

Tragedy（否 comedy かも知れぬ）はこれから始まる。

俺の見た table の間違いであろうと、俺の間違いであろうと（table の error であると確信しているが）俺の責任だ。期待した列車がないと、本隊と共に、その日のうちに宇奈月を出発できない。本隊においてきぼりにされるか、本隊の行動を一日延ばすかの何れかである。しかも俺一人ではない。食糧もあった。全く絶望的であった。唯行ける所まで行って、そしてあきらめよう（本当にあきらめられる性質のものではなかったが、どうにもここまで来れば仕方がない）と決心したわけだ。そして貨物連結の列車に乗った。柿崎でのろのろして車中に残されたまま、貨車から離され、駅員（それは親切なはきはきした乙女であった）に注意されて、大慌てで降り駅長に願い、貨車の車掌に願って、走り出した貨物列車の最後の車に、あのデッカイ ルックを背負って跳び乗った。間に合うか否かの心配（全く絶望的だった）は言いようがなかった。直江津に着いて見なければ分からないと云う未知なる故の唯一の灯を目標にガタンガタンと揺られて行った。

途中何度も車を引き離す所があったがその日に限って荷がなかったそうで、そのために、列車は遅れることなく smooth に走って行った。そして本隊のいる上野発米原行と同時に構内に滑り込んだ。そしてようやく皆と笑顔を合わせることが出来たわけだ。その時の嬉しさは地獄で神様に救われたといった気持だった。皆も云った「ホームで会ったときの、俺達の悦とした顔は並みでなかった」と。

宇奈月についたのが 12時50分。

本隊が大きなルックと鍋を背負って、大岡山と上野駅で「何処から引き揚げられましたか」と聞かれたそう。しかし、その時の皆の顔は未だ普通に白かったそうだ。

July 14, a little cloud

- 3:30 起床
- 3:59 浦佐発
- 12:50 宇奈月着
- 14:15 樺平
- 15:30 阿曾原飯場

宇奈月より 阿曾原まで

宇奈月で先発隊と合し、ゆっくりする暇もなく、日本発送電の電車——生命を保証せずというトロッコ電車——に乗って出発した。

宇奈月を出てずっと黒部峡に沿って行く、やなぎばし、もりいし、あとびき（黒薙）、ねこまた、^{きんしゅう}錦繡温泉、鐘釣温泉、小屋ノ平、樺平と危なげな電車は、クニャラクニャラと黒部の溪を巻いて或は鉄橋を渡り、或はまた、岩を穿っただけのトンネルをくぐって進む。電車が蛇のように進路をくねらせれば俺達の体は右に或は左に押し付けられる。下は渦巻く清流かトンネルのむきだしのガツガツした岩盤である。

5万分の一の地図の横一杯の長さ、しかも、こんな^{ガケツチ}崖縁に、良くも電車を通したものだと思心せずにはいられない。線路に沿っては更に冬、人が通るトンネルが続いている。真夏だと云うのに溪流の涼風が真っ向から強く吹きつけるので寒い位だ。眼下を流れる黒部川は青く白く或は牛乳の様な色に渦を巻いている。巨大な発電所、ダム of 壮観、大自然そのままを背景に建てられた、人里離れた山奥のこの近代建築。俺達是一言も発せず唯ポカンと移り行く自然の驚異と科学の力に魅せられていた。

樺平で電車から降ろされたが日発の特別の好意で更に奥まで乗せて頂く。高差200mの elevator にも、そしてそこからずっと阿曾原まで電車（蓄電池動力）に載せて戴いた。阿曾原から更に運転手の好意により、高熱トンネル（高熱隧道）へも案内された。この軽便鉄道に対して、日発と先発隊に大いに感謝せねばならない。阿曾原に着いたのが15時30分。そこには飯場の跡があつて、わずかばかりその面影を残していた。余りきれいではないが、どうにか雨ものしり、焚き木もあり、その下は黒部の溪が真っ白い渦を巻いていた。泊まるにはまあ良い場所と云わねばならぬ。脚下の溪の縁には、到る所 boiler の安全弁からもれる steam のように、不気味な音を立てて湯気と熱湯を噴出している。夕方には岩の下 of 温泉につかったが、すぐその周りには、雪溪があり、湯を出ると寒かったが、なかなかシャバでは味わえそうもない気分であつた。

高熱トンネル（高熱隧道）の中は cooling のために水を流しているが、それでも60℃はあるそう。中は霧の立ち込める木製（車台の上の囲い部。硫黄による腐食の為木製）の車に乗って、そのトンネルを出て急に冷たくなった顔で振り返ると、今出てきた穴からもくもくと湯気がでている。地獄から出てきたようだ。出た所に dam（仙人谷ダム）がある。そこで、しばらく遊んだが、全く凄惨、凄惨の連続であつた。夜は fire を焚き、mountain song を唄った。Fire の周りの真っ赤な童顔達の歌声は、脚下の^{なが}溪れに吸われて行った。

2015年3月
初版発行

1949年(昭和24年)7月
東京工業大学 山岳部
夏山合宿記録 27年卒羽賀舜布記録

校正・編集
28年卒須山英三
35年卒小野恒司

July 15, Very fine

6.00am 湿度 67・18.5℃

10.30 湿度 74・12.0℃

6.30 朝食

7.55 出発

8.15 横道通過

9.00 尾根

10.00 雪溪に到る。食事

11.00 食事終了。出発

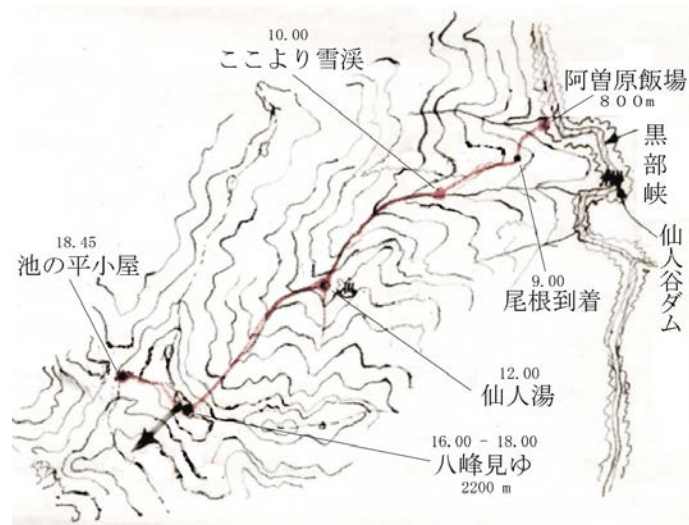
12.00 仙人湯

14.40 尻割

16.00 稜線 休み

18.00 出発

18.45 池の平小屋



今日からは乗り物はないのだ。車に運ぶのにも骨の折れた ルックザックは今日からは常に背負って、しかも、高いけわしい山路を歩かなければならない。誰だって重い物を背負って山を登るなんて喜びもしなければ欲していない。それなのにどうして、こんなものを背負ってまで山を登るって云うのだろう。自分乍ら可笑しくさえもなる。今日は本合宿中最も難行を予想されている。皆の顔には山に入った喜びと、同時に本日の難行への悲壮な決意の色が浮かんでい

る。大学の誰とかさんからの贈り物だと云う、10cm立方位の葡萄糖を、精力をつけるためにボリボリかじり始める。
準備完了し、7:55 出発する。ピッチはゆっくりとスロー、スローで登高を開始する。飯場から尾根までは、森林中を急登する。黒部の溪の響きが次第に下方に下って行く。そして、何時か消えて行く。

牛の如く歩みは遅く、しかもネバリ強く、皆の顔は汗で水をかぶった様である。尾根へ出てから。これを右手に巻いて、再び登行を続けること40分、ようやく雪溪に取りついた。今年は雪が多いと聞いてきたが、たしかにそうらしい。ここからは、ずっと尾根の上まで雪溪が続いている。勿論雪溪の先は見えない。この辺より、鹿島槍、五竜、唐松等が驚く程に近くに見える。ここで昼食を取る。雪と葡萄糖の mixture は実にうまい。葡萄糖もここで無くなった。ものすごい食欲だ！ 11時過ぎ、アイゼンをつけて出発。今回初めて踏む雪溪。ザックザックと雪を踏むアイゼンの音。ゆったりとリズムカルに。三パーティーに分かれた我々は長い雪溪の上を三つの黒いみみずの様に次第次第に高度を増して行く。傾斜は次第に直登出来ぬ位に急となる。やがて仙人湯が見えて来た。

仙人湯と云っても今は入れる湯などない。あたかも、地獄の如く、硫黄臭い石原、砂の間からブーブー熱湯が吹き出ている。(ここへ見に来たのは俺だけだった。他の者は下の雪溪の縁で休んでいる。俺が帰って直ちに出発

となったが、休まず^{とび}躍回っていたので、後でギョッとする程疲れてしまった)足の下でグ、グ、グと不気味な音がする。一人だと気味が悪い程だ。

この頃よりルックザックが肩に食い込み始めた、pitchは乱し勝ちとなる。何処までも同じ雪溪が続いている。少しも終わりそうにない。何しろこの日の荷物の平均重量は八貫(30Kg)以上もあったろう。稜線も間近くなった頃 leaderの森田氏がアイゼンで脚を負傷し、真砂沢小屋まで行く予定は、池の平小屋泊まりに変更される。

あそこが稜線かと思って意気込んで行くと、その先に又雪溪は続く。そんなことを続けること数度。又もだまされたと。あの先も未だあるんだろうと、意気込みもせず、ゆっくりと喘ぎ喘ぎ、うつ伏せかげんに雪溪をつめる。あっ!まだかと思って前方を見上げたその時、雪溪は空間に切れて、そのspaceの向こうに、黒々と聳え立っている八峰が・・・、「オッー、ワァー」「八峰だ」「剣だ」「すごいぞ」・・・と、重いルックを下すのを忘れて、八峰に見入る。折からの逆光に地球の果てもかくやと思わせる八峰の岩塊。一峰から八峰まで、次第に高度を高めて、屹立する。鋭い鋸の歯のように。そしてその南側は数千尺の目の下に落ち込んでいる。

更に八峰の上に75°のfaceをかけたのがチンネだ。唯々アゼンとして声もなく見入るのみ。まるで馬鹿のような、或は子供のような顔付きをして。しばらくして、視野を180°回転すれば、今俺達の登って来た谷、黒部の谷を隔てて鹿島、五竜、唐松、白馬等々の後立山連峰が連なって見える。十字峡を隔てて、十日後には超えてゆく針ノ木が見える。ここで2時間余、偵察、写真スナップ、スケッチ等思い思いに、今までの疲れを忘れて踊り廻る。ここまでの登行した高差は約1400m。あの重いルックを背負って良くもここまで登れたと我々ら驚く。しかし、この尾根上での疲れを忘れて大自然の美しさに抱かれ切った気持は、この上ない喜びを与える。今までのあの口に表わされない、はげしい苦労を全く忘れさせて「またここに来たいなあ」と云わせる程に美しい。いや、素晴らしい。いやいや、とてもそんな言葉では云い表せない、世界である。

18:00 名残を惜しみ乍ら、小屋を求めて出発。稜線を北に巻く。

雪溪をトラバースすること数度、ガスの中にコルの上の2棟の小屋を発見。

剣沢から来た4人のpartyと同時に到着する。

小屋(無人)は焚き木が豊かで、のんびりしている。

夕食は、生まれて初めて喰ったと云う、もの凄く辛いカレーライスを喰わされた。

July 16, Very fine

- 8.30 朝食
- 10.00 小屋出発
- 11.00 小窓の雪溪
(昼食 1 時間)
- 13.00 三窓の雪溪出合
- 13.15 近藤岩（二股）
- 16.00 同 出発
- 18.20 真砂沢出合
- 18.40 天幕場

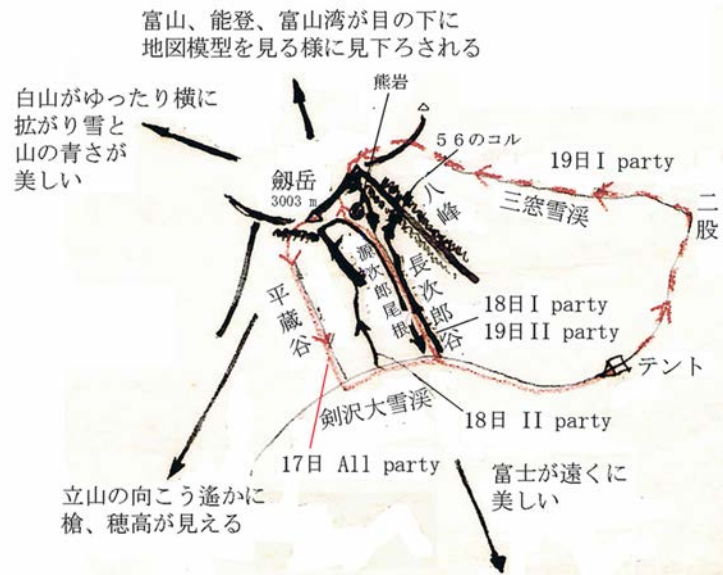


昨日の疲れで大変ぐっすり眠れた。池の平から見た朝日を浴びた八峰も美しいが、昨日稜線から見た時程の圧迫感はない。岩々のすごさも見られるが、朝日に照らされた、明るみに出された、ロックフェイスはむしろ親しみのある感じである。 ゆっくりと支度をして、陽が大部上に昇った。10時ようやく小屋を出発した。何とのんびりした山旅だろう……。雪溪をトラバースし岩尾根を上下し乍らトラバースして小窓の雪溪に出る。ここで谷岡氏足を滑らして将に落ちんとしたが彼氏の巨大な腕力がかの重いルックと巨体を喰い止めた。将にヒヤリである。ここからずっと二股まで雪溪が続く。途中昼食をとる。ショッパイおかずだ。降る一方の雪溪は重いルックのために、足をガクガクさせる。二股近くで、剣沢の大雪溪に入る。二股では進路を失い、進路発見のため大部時間を費やした。ここで雪合戦等をして遊んだが、それ程俺たちの山行きはのんびりである。メツチェン二人を伴った富山の party に会い、路を左岸の高巻きに巻いた路をとることにした。ここから真砂沢出合まで二時間余、ザイルの欲しいような悪路に悩まされる。テント場に到着したのは夕暮れ近くで、すでに薄暗くなり始めた。18.40 であった。

テントはすばやく設置され、焚き木も十分にあり、気分の好い幕営である。

(20.00 天幕内 13.6℃)

校正・編集
28年卒須山英三
35年卒小野桓司



である。なお目を180°回すと、今登って来たばかりの岩をへだてて、南に遠く富士がぬきんでて望まれる。東西は岩峰にさえぎられて見えない。軽い lunch をとって再び頂上目指す。石塊を積み重ねたような山だ。頂上！快晴の剣山頂！高山の空は蒼い。視界をさえぎるものは何一つない。クルクルと目を転ずる。後立山連山が続々と続いている。一族ずらり並んで。やがて越えて行く針ノ木峠も。真南には檜、穂高が、更に、西側には、御嶽その西側には堂々と肩を横に流し、雪を美しく着ている白山——しとやかな京都の官女を思わせるような——が。展望は素晴らしい。

感激の喜びが胸にこみ上げて来る。悦びの涙が山頂の風に当たって冷たく感じられる。俺達は大自然と唯一つに溶け合っている。自然も自分も別がない。若し太陽が沈まずに何時までも地表を照らして呉れたらきっと俺達は、そのまま幾日でもそこでジット周囲の山々を眺めているだろう。

一時間の休憩後出発。平蔵の雪渓までは一般ルートであるが、針金が切断されていたりして肝を冷やさせられる。ここからは下まで急な雪渓。雪は適度に腐っている。グリセード！快適！1時間半の滑降——初日であり足が疲れる。先頭になる。時々上を振り返る、まだ遥か上の方で小さい黒い塊が転がり乍ら降りて来る。Top になって14.30に天幕に着く。快い楽しい一日であった。

(夕食には、これ以上あまいものはないという程の甘いカレーライスを食べられる。夜中急に腹痛起こり夕食の肉があたったかと心配する。この頃より皆の顔がむけ始める。ヒタイとハナノアタマから第一に。)

July 18. Fine later a little cloud

II.源次郎 party

起床 6.30—食事 7.00—出発 8.45—長次郎出合 9.30—源次郎取付け点 9.45—尾根 12.00 (食事 30 分)—K.1,K.2 コル 13.30—K2 14.30(休 30 m)—懸垂開始 15.30—終了 16.20—グリセード 17.00—天幕到着 top 17.40

I.八峰 party

5.6 コル 11.00—K6 12.00(食事 50m) K7 13.40—K8 と八峰の頭とのコル 14.35—八峰の頭 14.50—グリセード 15.15—天幕着 16.10

(II party の記録)

出合で八峰 party とヤッホーを交して別れる。取付け点でワラジに履き替え、尾根をわずかな踏み跡をたどって行く。

尾根取付けまでは岩がもろく、落石しきりで快適とは言い難い。

「落石一つにつきまんじゅう一つ」等と云いながら登って行く。尾根は這松が多く、これをかきわけるとアルバイトは大である。

休み休みのんびりと登って行く。長次郎谷一つ隔てた向こうの八峰では、黒い

人影（八峰 party）がシルエットのように浮かんで又かくれる。
いよいよ音に聞こえた二峰の下降にとりかかる。直立、30m 近くある。30mのザイルを2本使って降りる。八峰が逆に、或いは横に見える。俺はこのアップ（アップザイレン）は何より好きだ。写真を撮り乍ら、ノンビリと下降する。その頃八峰 party は直ぐ目の前の雪渓を滑降し始めた。黒い影、スーツと降って行く。後から続く、誰か、丸太を転がしたように、二、三回転して止まる。実に壮快な転倒の仕方だった。俺達のパーティーは頂上は省略して、ここからグリセードを開始する。急に下が見えず誰も先頭を欲しないらしい。Top になって俺が滑り始める。制動し乍ら、クレパスを警戒し乍ら。Top は気分がよい。昨日より大分なれて40min で滑降が終了した。連日の快晴続きはそろそろ崩れ始めた。明日も快晴のまま持ってくればよいが。

July 19 Fine later rain little while.

I. 三窓 party

II. 八峰 party

長次郎出合 9.15—雪崩（源次郎 K.1 下より）10.10—熊岩下 10.45—5.1 のコル 11.15—（12.00 発）—K.6 12.30—K.7 13.10—K.8 下のコル 14.30—雪渓 15.00（三窓 party と合する）—テント着 16.00

食欲の如何は登攀の fight を直接左右する重要な factor であることは俺達の常に経験する所である。したがって、今回の如き合宿等の case では炊事当番の使命は、甚だ重大であると言わねばならぬ。今若し、本日の山行に不幸 accident の発生を見たならばその重要な責任者の一人として、今日の朝食を調理した炊事当番を挙げるに猶予しないだろう。——前オキハトモカク、今朝ノメシマズカッタゾ。——

重荷を負ってのテント場までの行程と、それから続いた二日間の剣廻りとで、今日の一行の疲労も甚だしくなった。

長次郎雪渓登行の途中、前方から危なげだった源次郎尾根 K.1 下の大雪塊が轟然と音を立てて二回程落ち崩れた。充分隔てていたので被害なし。

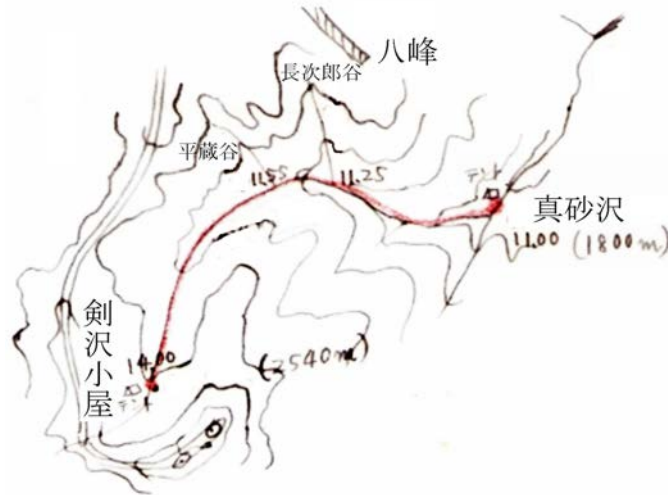
5-6 のコルでワラジに履き替える。

この頃から風が強くなり、三窓側しきりとガスが去来する。岩かげに風を避けて lunch を取る。三窓 party はこのガスの中をどうなんだろうと気遣う。K.6 辺りのお花畠は美しかった。鬼も顔負けの、あの険しい岩尾根の上にあんなに威圧するような岩塊の間に、しかもこんな高い所に、見るからに可憐な花が、冷たい風に揺られ乍ら咲き乱れている。黒百合の花も悲しい伝説を秘めて浮き世を離れてここで咲いているんだと云わんばかりに、とびとびに他の花の中に混じって、或いは岩陰に咲いている。

仙人尾根にたどり着いて、あの圧するような八峰の岩塊を仰いだ時に、どうして、こんな可憐な花がそこに咲いているだろうなんて思えただろうか。
ガスの去来は烈しくなって来たので先を急ぎ始める。K.8で遂に雨になり急いで雪溪に降りる。
三窓の party と一緒になってグリセードを開始する。三日間で大分上達している。最後のグリセードを楽しみ乍ら滑り降りて行く

July 20

8.30 起床
9.00 朝食
11.00 撤収・出発
11.25 長次郎出合
11.55 平蔵出合
14.00 剣沢小屋
17.30 夕食
20.30 就寝



今日は休養の意味で非常に楽な行程となっていたが、連日の疲労の累積と天候不良も災いして、乱れ勝ちな前進を続ける。三時間を要して、漸く剣小屋に着く。風雨中に設営を終わる。当日は炊事当番で、生の這松に風雨と来て容易ではなかった。ブルブル震えながら煙に包まれて漸く飯を作ったわけだ。熱いミルクの味は良かった。明日の晴れを祈って寝る。出発以来一週間、一步一步これから里と近づく喜び、やはりそんなものを感じる。

July 21. Rain and Wind.

7.30 起床。 昨夜の星空にかかわらず、一晩中吹き続けた風はまだ収まらず、雨も時にあり。天候好転の兆候全くない。
協議の結果沈澱と決定する。既に予定より2日延び、尚程遠い前途の食糧を考慮して朝食の3.5升を以て今日一日の分とする。
悲劇とも喜劇とも言いようなし。谷岡の水分90%の雑炊は笑うに笑えぬ傑作であった。

Energyのある連中（俺もその内の一人）がグリセードの練習に行く。テントでは里の話が花を咲かす。皆大分里が恋しくなって来たようだ。「大町へ出たら真っ先に汁粉を食おう」なんて云う奴、「東京へこんな顔で帰ったらメツチェンどんな顔するかな？」なんてぬかす奴。「早く帰って人間らしい食事をしたいものだ」と尤もらしいことを云う奴。そして非常食糧であるべきお菓子は段々少な

2015年3月
初版発行

1949年(昭和24年)7月
東京工業大学 山岳部
夏山合宿記録 27年卒羽賀舜布記録

校正・編集
28年卒須山英三
35年卒小野桓司

くなって行く。・・・コッソリと雨の沈澱・・・又よからずや。シュラフに抱かれて、一日中を歌と話で暮らす。シュラフの中で、テントの入口を開けて目の前にそそり立つ剣・八峰を仰ぐのは又何とよいことだ!!!

July 22 Cloud

6.00 起床
直ちに朝食
撤収
7.50 出発
9.20 別山尾根
10.30 昼食
12.00 大汝山
12.35 立山
12.25 昼食、出発
13.55 一の越
14.30 浄土山
16.40 ザラ峠桜のピーク
17.45 ザラ峠手前
18.20 五色ヶ原
21.00 夕食

July 23 Fine

8.20 朝食
9.30 出発
11.10 刈安峠
12.30 平ノ小屋



July 22

風はまだ強くガスもまだ深かった。しかし一日の沈澱に皆元気回復し、撤収も忽ち終わり出発する。幅の広い急な大雪渓をグングン登って行く。別山尾根へ出るとガスを流している風は相変わらず強く吹きつける。風をよけてアイゼンを脱ぐ。珍しく数羽の子を連れた雷鳥を見つけた。全く恐れのない無邪気な姿だ。近寄っても逃げようとしない。

まるで俺達を信じ切っている。俺達山男の心もかくありたいものだ。人を信ずることのできない都会の生活の様なものにしたくない。

いよいよこれからは3000mの高度に登ったり降ったりさまようわけだ。

道はしごく良い。路端の岩には可憐な高山植物が色とりどりに咲いて、下から吹き上げるガスに揺れている。

立山の登りにさしかかる頃より一般の登山者と頻繁に会うようになった。婦人を数名混じえたパーティーもあった。皆俺達の真っ黒なヒゲズラを見て驚いて過ぎ去る。立山の頂上では北側のガスが深くて今来し方を顧みることも出来ず残念だった。南は谷一つへだてて、二、三日後に越える針の木が見える。槍も遠くに望まれる。一ノ越まではガラガラの下りである。折角登った山を降って又登らなければならぬと思うとウラメシイ。これから又浄土山を越えねばならぬ。

このあたり一帯は仏教の国へ来たようで、ミクリが池だとか、浄土だとか果ては地獄谷だとか・・・と色々線香臭い名がある。地獄谷から来る硫黄臭いガスが一面漂っている。ラクダのコブを幾つも並べたような山の列に登ったり降ったりして行く。背のルックザックが食い込む。歩調も乱れ勝ちだ。top と last が開き勝ちだ。

何しろ 3000m の山並みを登り下りだから消耗だ。おまけに何と長い。けれども路々の高山植物が何時も元気付けて呉れる。剣になかった、美しい花もここで咲いている。ザラ峠手前のピークを登った時はホットした気持ちだ。目の下の・・・と云っても 2000m だが・・・五色ヶ原がまだ雪を覆って、ゆるやかなスロープをなして横たわっている。ここからザラ峠までは急な降りである。下れど下れどザラ峠は出て来ない。足がガクガクする。そのうちに真下に見えた五色ヶ原が上に見えるようになった。コンチキショウ!! 漸く、今来たピークと五色を見上げるような谷底へ来た? これがザラ峠だ。まるでこの峠は、峠ではなくては峠のようなようだ。しかし待て。俺達の路と直角に路があるがこれがこの点で峠になっている。所謂馬のクラの真ん中に当たるわけだ。ここから又 300m 余登る。空腹、疲労甚だしく五色も尚遠く思われた。非常食が出る。Oh! ヨウカンにも値する。二、三十分して五色へ出る。

のんびりした美しい高原だ。何しろ日本では三つの高原の内の一つだ。疲れも何処かへ吹き飛んで行くようだ。

芝原の様な草の上へテントを張る。忽ち日は暮れ薄暗くなる。草原彼方の白雪を頂く峰の夕映えの色が何とも云えず美しい。Abendsonnenschein!!!!

夕食の薪を拾っているときに、山桜を見つけたが今時のサクラも又よからずやと思った。ビタミンC が欠乏して皆野菜を欲しがるので、ある植物の大家? の薦めによって若菜をつむ。山小屋の人に聞いてそれが毒であることを知る。もう少しであの世行きとなる所だった。注意せにゃならんもんだ。夕食は 21.00 大分遅くなった。明日は軽い行程であることを言い渡されてこの高原ののんびりした草の上で、安心してぐっすり眠りに落ちる。

July 23 Very Fine

今日は素晴らしい快晴。出発までの僅かな時間を広々とした草原に寝転んで青空を眺める。白い雪田と緑の原、そして遠くに残雪の白く輝くアルプスの山々。五色ヶ原は本当に美しい桃源郷だ。昨日の苦闘がうそのようだ。平の小屋までむちゃくちゃに下る。暑い。膝がガクガクする。小屋で昼食。うまい。岩魚に舌鼓を打ったら歩くのが嫌になって、予定通り平泊まりとなる。河原に沸いている露天風呂(手で石コロ、砂を掘って穴を作るだけ)に10日間の汗を洗い落とす。もう明日の針の木越えでこの10日余りの山旅にピリオドが打たれるのだ。里に降りたら、あれを喰おう、これを食べたいと専ら食う話ばかり盛んとなった。

夜はメインリーダーと一つのザックの中に入って黒部川の河原に寝た。露を避けて木の陰に横たわる。葉の間に星がキラキラと美しくまたたいている。川の流れは、やさしい子守歌だ。湿度計と温度計を枝にブラ下げるのも、少々文化的な素朴さである。何時しか、里の夢の世界へ。

July 24 Very Fine

7.30 出発
9.15 南沢
11.45 出合
15.10 針の木
16.00 出発
17.35 大沢小屋



最後の行程である。早朝、吊り橋を渡って沢沿いの道をいく。相当荒れている。出合まで数回の徒渉を繰り返した。出合付近は物凄いデブリで荒涼たる有様だ。ここで左に折れる。遥かに針の木峠とおぼしき所が仰がれる。

漸く Zigzag な急な登りとなり峠の小屋の見える辺りで、第2回目の昼食を取る。峠から信州側はまだ目の届く限り雪溪の連続。しばらく最後のグリセードを楽しむ。オ、最後だ。今年最後のグリセードだ。心して滑ろう。

大きなザックがある限りグリセードで降りるか否かは大分議論があったが、結局大丈夫と云うことになり、俺が真っ先に降り始めるや、皆後に続いた。スピードを抑え乍らぐんぐん滑り降りる。下から登って来る連中、目を丸くして見ているので、いささか得意になる。行けども、行けども雪溪は終わらぬ。小屋番に聞くと今年程雪の多い年はかつてなかったと云う。

テントを張る河原がなく、小屋から更に30分ばかり降り、丁度降り出した雨の中で、猫の額程の所にテントを張った。

米も残ったので、この日の夕食一人当たり2合5勺、朝から総量8升、一人当たり約7合！！ ギョツ！！

July 25 Fine

大沢→白沢橋：トラック→大町→松本→長岡→帰郷

白沢橋でようやくトラックを捕まえて、山のように積み上げた薪の上に全員何とか這い上がる。黒部の軌道以来の乗り物だ。成る程歩くよりは楽だ。それに速度も速いし・・・と野蛮人は盛んに感心する。

見る見るうちに今まで歩いて来た山々が高く雲の中に隠れて行く。次第に里人の香りが濃くなり、大町に着いたのが丁度12時。ラジオの音響が耳新しい。松本で町を見物。夜はパーティーと別れて一人駅で一夜を明かし、翌朝長岡に向け出発。長岡の叔母さんの所で一休み、物凄い顔に驚かれ、その夜相変わらぬ顔で、我が家へ帰る。

久振りで懐かしい人に会えたように思い、我が顔の見にくさを忘れるばかりであった。

山々の楽しい、苦しい思い出、可笑しい思い出、オッカナイ思い出。

自転車やトラックという文明の利器があるのに重いルックを背負って、足で歩いて山に行く男もいる。今苦しかった思い出だけれど、又時が経つと山が恋しくなるだろう。

(終)

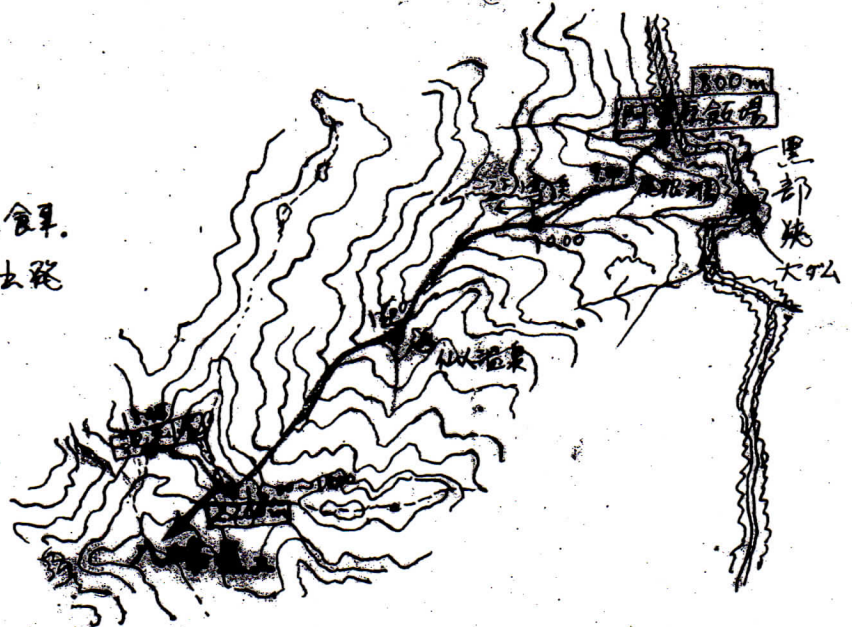
Abschied

Muß i denn, muß i denn
zum Städtele hinaus, Städtele hinaus,
Und du, mein Schatz, bleibst hier?
Wenn i komm', wenn i komm',
wenn i wiedrum komm',
Kehr' i ein, mein Schatz, bei dir.
Kann i glei net allweil bei dir sein,
Han i doch mein Freud' an dir!
Wenn i komm', wenn i komm',
wenn i wiedrum komm',
Kehr' i ein, mein Schatz, bei dir.

July 15, Very fine.

6 a.m. 湿度 67 18.5°C
10:30 p.m. 74 12°C

6.30 朝食
7.55 出発
8.15 峠道通過
9.00 尾根
10.00 雪溪に到る、食草。
11.00 食事終了、出発
12.00 仙人湯
14.40 尾割
16.00 後線
18.00 出発 (休)
18.45 池の平小屋



今日から日持ち来物はふいのに、車に運ぶのにも暑の折れたリュックバック
は、今日から常に背負って、しかも、高リけわしい山路を歩かふ、けわしい、
い。誰だつて重い物を背負って山に登るふんて喜かふ、けわしい、
きねふのに、どうしてこんな物を背負ってまで山に登らつてふ、のらう、自分下、可
笑いさへもふ。今日は、本合宿中、最も難行を予想してゐる。
皆の顔には山に入った喜びと同時に、今日の難行への悲壮な決意の色が
現れてゐる。学校の誰とか土人からの、お贈り物だとか云ふ、10cm 立方位
の葡萄糖と、精肉をつけたために、ボリ、かき、かき、かき。
準備完了、7.55 出発。ピッチはゆくりとスロー・スローで登高を
開始する。飯場から尾根までは森林中を急登する。黒部の溪の響が次
々に足の下に下りて行く。そして何時か消えて行く。
牛の如く歩みは遅く、しかもネバリ強く、皆の顔は汗で水をかぶつた様
である。尾根へ上つてから、水と右手に巻いて再び登山を続ける事 40 分。

ゆっくりと支度をして 陽が大部上り昇った 10 時やうやく小屋を出発した。何と
かんびかりた山旅だらう……。雪渓をトラバースし 岩尾根を上下し下り
トラバースして 小窓の雪渓に出る。こゝで右岡氏 足を滑べらして 將に落ちんとして
か 鉛板の巨大な腕力か かの重りルックと巨体を喰^止めた。將にヒヤリである。
こゝから ずっと二股まで雪渓が続く。途中晝食をとる。シヨツハイ おかすた。
降り一方の雪渓は重りルックのためは 足をかくくさせる。

テントは 如何やく 設置され、焚火も充分あり 気分の好い 幕営である。

July 17. (Very fine.) ~ 19.

- II. 18日 I と 7 日



2015 年 4 月
初版

私の小さなケルン
昭和 25 年卒 石川傳七
昭和 24 年 7 月の記録

OCR・校正
昭和 28 年卒須山英三

漢文調の原文を須山さんと小野さんが
読みやすいように現代語版に変換したもの。

私の小さなケルン

25 年卒 石川傳七

「山は謙虚に入る者に慈しみの手をさしのべこそすれ虚栄、見栄、惰廃や安易な自己満足などを受入れては呉れぬ、時にそれを身に付けていたために生命をも奪い去られる事がある。山は壮麗にして峻烈である。」

私は甲府に参年程暮した事がある。故郷の中学を終えるまでのスポーティブな十七年間を茫々とした九十九里と、担々たる九十九里平野の森や林や、その間をゆっくり流れる河を見て暮して来た。

だから山に接するのは甲府が始めてなのであるが、この山に囲まれた地に通学したのが余の山の生活の第一のケルンを積む必然的な根底となったわけである。

そこで参年間山を見てしみじみと得たものは宇宙感情だ。それは宗教感情だと云ってもよい。

そしてその宇宙感情を与えたものは富士よりもむしろ南アルプスだ。

富士は秀麗でもあれば崇高でもあるが何と云っても形の美しさが根本的だ。所がアルプスは形の美しさなどでなく臥牛のごとき重量感が根本になって見えるが遠くに見える関係もあるせいとか何か恐ろしいとか、怪しいとか云うように情感される。何か神秘的に見えるのだ。整った形の無い所に入りえないものがあってそれが神秘に見せるのだと思った。

この自然に対すると云うより宇宙に対する感情と多少のロマンチズムが東京の大学に移ってから組織ある山岳部への入部手続を取ったのである。

終戦後二年目の物の不自由な時に粗末な菓子と薄いコーヒーで新入部員歓迎コンパに列席した時から押しも押されぬ山の男が出来上がったわけである。そして私は山に入る人の当然通るべき道を良き部員を友として歩み始めたのである。

即ち、地図の符号、等高線に対する感覚、距離の概念、現在地の判定、コースの選定などの地図の読み方、又地図の上での水場、薪又は雪崩に対する設営地の選定及び設営或いは気象などを丹沢、三峠などでの岩登り沢登りあるいはザイル捌きなどの実技と織り交えて勉強し始めたのである。

私は今、山の壮麗さや山の生活の楽しい面などに深く触れようとは思わぬ。

とても私の筆の及ぶ所ではないから。唯自己にのみ目を向けて行く事にする。

やがて初めての合宿を穂高に選んで思い出多き十日間を送ったのだが、活動している時は感じないが一日の山行を終えてキャンプファイヤーを囲んでいたりとフット淋しくなったり、恐怖感などに包まれ、どうも山の生活にじっくり融け込む事が出来ない事があった。

そして山に向けられた私の認識は大局的に山の生活を感じる程広い物とは言えなかった。

丹沢山に入って今日は勘七、明日は宿木と沢登りしてもしぶきに濡れる草鞋に感激したり、三峠の岩場でも黒々とした岩壁の冷やかな感触に感激し、穂高

三峯のフェース、ジャンダルムの飛驒尾根といったずらにスリルを味わって居ったに過ぎず^{まっしょう}抹消的な登山の完成を念願として頂上に立つ事に、一つのルートを仕上げる事に、グリセードする事に山の生活の生甲斐を感じて、ベルグハイルを叫んでいた。

山を慕い山に魅力を感じながら、しかも山を知らず平常の利己的な独善的な生活感情をそのまま山に持込んだ為に起った自然とのギャップに無意識ながら驚きを感じそれを打消^{ただ}そうとして唯山登りに夢中になって居た時代があり、これが私の山行きの初期の一時代を為している。形式的な形のみを追っていた頃といえる。

従って振返ってみるとその時代の山登りは非情に張切った生活でピンと張った糸の様に弛みがなかった。唯一生懸命であったために全然余裕がなかった。

私の場合幸か不幸かすぐ上に上級生か居なかったために二年になると対内的にも対外的にも、部の運営一切が私達の肩にかかって来ると同時に新しい部員も入ってきて俄かに部生活に対する責任を余儀なくされ、私達は悲鳴を挙げながら進んだ。

黙っていられなくなったので悲鳴を挙げたのだが、^{しゃにむに}遮二無二進むことに何か宿命の様なものと安心感とを感じていた。

この頃から私の山行きに対する考えも少しずつ変化して行き今までの懷疑が比較的鮮明な形を取り始めた。それは山行きとは宇宙的感情を真摯な姿で体験すべきものであると考え始めたのである。私の過去の生活から形式的な山行の存在を知ったのである。

具体的には沢登りや岩登りのテクニックや興^{きょうかん}感それ自体は山行の手段の一部に過ぎぬ事を知ったのである。沢登りや岩登りのテクニックに全身を打込んでそれらの素晴らしい味やスリルに迷って山行の本来を見逃しておったといえる。

しかし反面からこれらに夢中になった或る期間を経て始めてこの基礎の上に立って、広い意味の山行の立場から夫々の実体を知って批判も出来るようになるのだと思う。従ってこの時代を考えて決してマイナスのみの生活だとは思っていない。その間にえた技術や技術上の自信は現在でも山行きの自信の揺るがしえない大きな根幹となっている位である。かくて私はボリュームのある山行、自然に融け込んだ生活为目标として部生活を送ろうと努めた。

この山行きとは時間的空間的スケールで論ずるのではなく、歌舞伎愛好者などの良く云う“芸が大きい”とか“役者が大きい”とか云う場合の“大きい”と云う極めて東洋的な表現がぴったりする。これは安心して山の雰囲気に入り得て始めて感じ得るもので、山の美しさを眺めるのではなくその美しさに自分を溶かし込む事であり、自らが美しくなることなのである。

唯^{ただ}漠漠と山に入り、漠漠^{ばくばく}として山に生活し、漠漠^{ばくばく}として山を降りるその間に人生を感じ宇宙を体験しボリュームを情感する。ここに山行の醍醐味が存在するのである。

抹消^{こうでい}に拘泥する事なく大きく山行を捉える事であり、更に山行に安心立命を

得る事なのである。

山に入るものと山との美しいまでの融合とそれに導かれる無我の境地だと言える。

そこには焦りも逡巡もなく飄々^{ひょうひょう}として余裕に満ちた山行きが在るはずである。かくのごとき可言説なるものである神人合一の絶対境に至り得るものであり、真善美の三者が宗教的な崇高さと感激の中に体験され最も深刻にそれを掴む事が出来るのである。

かくて昭和二十四年夏、剣岳の合宿を終って帰京。

肩に食込むキスリングを降ろして部屋のドアを開いた。とドアに挟んであった白い紙片が足許にポトリと落ちた。

左手のピックルがいやに冷たかったのを憶えている。不安な予感で開いた紙片は電報用紙。

ハハシス カエレ チチ 日付は！ すでに十日前。

1949年7月17日

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

悲哀の甘きは泣くべく又歌うべしとかいう。

しかし、真新しき墓標の前に佇^{たたずん}んで私はその苦しさに、唯冷やかなる涙の力なく頬を伝わるのを覚えるばかりであった。

私は徐^{おもむろ}に仰ぎ、徐^{おもむろ}に伏して人生の凄涼^{せいらう}を感じて涙を押し拭うばかりであった。

この思いも掛けぬ時の一致に安泰と信じた私の山行論は大きな障碍に突き当らざるを得なかった。

剣岳の合宿は当時の私の運命と環境とに於いて最善を尽くすと信じて参加したのであるから私自身に取って、すでに他からの批判を絶した事実であると信じている。だから他からの如何なる批判も抑^やゆ^ゆの限界を超える物ではないが

生死盛衰^{せいしせいすい}、会者定離^{えしやじょうり}は世の常とは言え、「済まなかった」と母に詫びたい心情に欺瞞^{ぎまん}はない。

心決らぬ儘に日は移って、厳冬季の鹿島槍ヶ岳へ東尾根からポーラーメソッドでアタックする時が近づいた。

参すべきか、否や！

(未完)

“